

こんにちは。

2月の一大イベントと言えば節分とバレンタインデー。バレンタインデーについては、今年は逆チョコなるものが登場して巷を賑わせたようです。現代の日本ではこのような現象からもわかるように男の子だからとか女の子だからなど言われることはあまりありません。けれどもそれは最近のこと。今月は、まだ男性・女性としての生き方が厳しく決められていた時代に男性として生きた女性の物語です。

『ライディング・フリーダム』

パム・M・ライアン 作 こだま ともこ 訳 藤田 新策 絵 ポプラ社

1365円 読み物

<お勧め年齢>

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆☆ 小高学年★★☆ 中学生★★★
高校★★☆ 一般☆☆☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

時は1800年代のアメリカ。主人公のシャーロットは孤児院で暮らしていましたが、孤児院から里親が見つかって出て行けるのは男の子だけ。女の子の自分の人生が孤児院の意地悪な院長のもとで一生皿洗いと決まっているように思えたシャーロットは、12歳の年に孤児院を脱走します。無事孤児院を抜け出したシャーロットですが、女の子が一人で生きていくことも許されない時代。仕事にありつくためには男の子に変装するしかありませんでした。幸い、シャーロットは乗馬が天才的にうまかったので、男の子に化け、名前をチャーリーに変え、エベニーザ親方のところで見習いとして馬の世話をしながら、駅馬車の御者になる勉強をしました。シャーロットには駅馬車の御者になってお金を貯めて自分の牧場を持つという夢があったのです。シャーロットの努力の甲斐あってチャーリーは彼が手綱を握るといえばみんなが乗りたがる人気の駅馬車の御者になります。けれども、ここでシャーロットに困難が降りかかります。思わぬ事故で片方の目が見えなくなってしまうのです。目が片方しか見えなければまっすぐ馬を進めることもできません。この困難に立ち向かうシャーロット。馬への愛と、御者という仕事への誇り、牧場を持ちたいという夢が、彼女の心を支え、遂に彼女はもう一度御者台へ登るチャンスをつかみます。

自分らしく生きるため男性として生きるシャーロットの胸には、孤児院で出会った馬の世話係ヴァーンという言葉がいつもありました。

『いいかね、自分の魂の声に耳をすまして、そのとおりにすればいいんだよ』

<子どもに手渡すときのポイント>

あとがきによるとこの物語は実話をもとにしたもので、主人公のシャーロットは実在の人物がモデルとなっているそうです。そのモデルであるチャーリー・ダーキー・パ

ークハーストは、本当に駅馬車の御者として生き、「独眼のチャーリー」の異名もとっていましたが、数人の親しい友人意外は彼女が死ぬまで女性だとは気づいていなかったとのこと。彼女の死後、チャーリーが女性だとわかって、アメリカのある歴史がぬりかえられました。それが何かもあとがきに書いてあります。

子どもにすすめるときには「よかったらぜひあとがきまで読んでみて」と一言教えてあげてください。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。

早良図書館 吉岡 さやか